

佐賀県立博物館報 No.58

佐賀市城内 1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



窯出し・運搬の図 (『肥前国産物図考』第7帖「焼物大概」部分 天明4年)

窯から出した大甕は褐色に光り、繩を掛けて天秤棒で荷負って運営りに出かける所である。右方の煙草を一服する人物の背には炎の痕がみえ、焼き物づくりの大変な様がさりげなく描かれている。

大甕は、江戸時代から貯蔵用や醸造用の容器として、また埋葬用の棺として、需要が伸びてきたもので、唐津領内でも盛んに焼かれた。藩の軍師であった木崎攸軒が著した「焼物大概」は押山村押川での「瓶焼」の状況を記録したものである。

押川窯は、明和3年(1766)に押川此右衛門が藩に税金を納めて開窯した。しかし焼け損じや低級品が多く、窯経営は困難となり、藩は分家の善太夫に焼造を命じた。善太夫は諸々の苦労・困難の末、攸軒が描写した天明4年(1784)頃には、安定した生産に成功していたようである。

明治初年に始まる相知町の横枕窯は、この押川窯の大甕製作技法を伝承したものである。

目 次

○窯出し・運搬の図	1
○資料調査—肥前の大甕作り (相知町横枕窯の記録(2))	2 ~ 5
○研究メモ—佐賀県における洞穴遺跡の立地 (その2)	6
○県内博物館案内 (その14)	7
○博物館日誌・行事のお知らせ	8

資料調査

肥前の大甕作り 一相知町横川窯の記録(2)

江戸時代以来の押川窯の製作技術を横枕に伝えたのは明治元年頃に上のカメ山に窯を築いた藤田類吉・卯平の兄弟であった。この横枕窯が全盛期を迎えた大正時代の初め頃は、7軒の窯元が大甕類を成形しては共同窯で焼成した。藤田勇氏が父の幸太郎（類吉の子）から技術を習得して、現在の地に藤田製陶所の工場と窯を築いたのは20歳、昭和3年のことである。戦争が激しくなった昭和18年頃から3年間ほど休業したが、復員してから再開し、社会生活の急激な変化による需要の減少などで昭和53年に廃業するまで、大甕作りに丹精を込めてきたのである。

大甕の製作工程と用具

土作り 原料の土は巖木川を挟んで横枕の対岸側にある弁天山（おん五郎山）から採取する。そこには横枕の窯元たちが共同で1町2反の土地をもっていたが、この山は江戸時代からの押川窯の採土地でもある。「弁天山の土はハシカイ（バサバサしている）ので、辺保木の土（ネバ白色で凝灰岩層の下にある）を三割ばかり混ぜて作る。藁土は押川の辻から取り、灰をまぜて漉したものを使う……」（『陶器史』『相知町史』下巻1977 551頁より引用）

原料の土の採掘は、店鍬や窓鍬・高麗鍬を使用した。高麗鍬は東松浦地方の農機具中には類例を見出しえない特異な形態の鍬である。採取してきた両地の原土は、それぞれ水を十分に含ませたのち、上記の割合でよく混合する。水を吸った粘土は素足で土踏みし、木樋で叩いて、小さな土塊を砕く。粘土を積み上げた塊りを削り鎌で少しずつ土削りしながら、混入している小石やゴミ等の夾



▲ 車坪（成形作業場）の状況

雜物を取除く。またサシとよばれる松材で作った櫛状の道具の側縁を刃として粘土を打切る、土切りをする。これらの作業で土作りは完了し、乾燥が進まないよう覆いをかけて工場の隅に粘土塊を積んでおく。以上は土練り機械を採用する以前の作業内容である。

成形 大甕作りの工程については前に記したので省略するが、粘土棒作りのため粘土積から適量の土を切取るには、両端に藁繩（または布切れ）をつけた長さ50cmほどの針金（またはエナメル線）製の土切りを使用する。

叩き成形技法で使われる主要な道具は、底打ち・底切り、シャレー・トキア、ソットフィテ・ナカフィテ、フチトリガワである。これらは自分の手に合うように細工した道具で、底打ち・シャレー・トキアの3種は、使用しない時は常に、水を張った道具裏に浸け込んでいる。



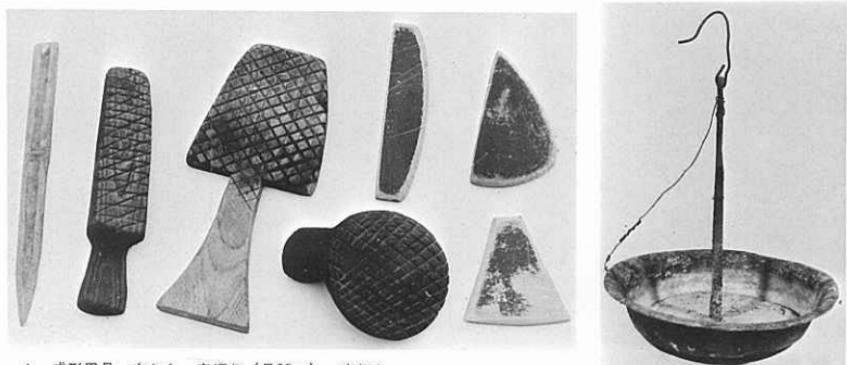
▲ 木樋

▲ 稲葉漉し壺
エグリ
チョッパス

◀ 高麗鍬



削り鎌 ▶



▲ 成形用具 左から、底切り（長33cm） 底打ち
シュレー・トキヤア・ナカフィテ・ソトフィテ

シュレーは外面の叩き板で、当て具のトキヤアと組で使われる。いずれも用材は松で、表面に斜格子状の刻みを入れているが、これは器面を打圧したとき、粘土が横に逃げるので防ぐためであるらしい。シュレーの裏面は平滑であるが、叩き成形作業に引き続き、この裏面で軽く叩いて格子目文様を打消す器面調整に使用される。把部は、道具が手から逃げないように三味線のバチ状に幅広がりとなっている。

トキヤアは丸材を輪切りにして、面を把部とは鈍角に作り出したもので、小型品では格子目刻みはつけない。

フィテは器面調整用具で、ナカフィテ・ソトフィテとも器面にほぼ直角に当て、クルマ上で緩かに回転するカメの内外面を平滑に仕上げるものである。

ソコキリは、ソコウチで叩き伸ばした粘土盤を底部の大きさに切り取るへらで、竹製と木製の2種がある。

チトリガワ（縁取り皮）は、口縁部の成形時に使われる木綿布で水に十分浸して滑りをよくしている。

以上の他に、クルマ・腰掛け、巻き繩、ヘラ・栓口の穴開け、尺竹、強制乾燥用具のヒツイバチ（火吊り鉢）・ジジャーカギ（自在鉤）等がある。

乾燥・施釉 成形した甕は、クルマ（輶轄）の鏡からクミで運搬して、庭先に置いた角板（後に丸板に変わる）に移す。水分を多く含んだ生の甕（素地）は直射日光に当てて乾燥させるが、廻し金で時々、角板の向きを変え素地の片乾きを防ぐ。

クミは甕を学生のお垂れ髪のように編み、松葉状に2本を紐で結んだ長さ1.9mの繩である。甕を運ぶには、2本1組のクミを差し違え、交差して出来る菱形部分を甕の下腹部に当て、左右の端を握って二人で運搬する。素地のクミが当たった部分は窪むので、内側からクミダシという棒で叩いて、形を矯正する。

乾燥した素地は、庭先の地に作りつけた、楕円形プランのコンクリート造りの釉薬溜めで施釉される。甕を釉

▲ 火吊り鉢

薬溜めに横たえ、二人がかりで回して、内外面に釉薬がかかるようになる。近年に、溜めに角材を平行に差し渡して素地を置き、外面はヒャクで流し掛けし、内面は製いた木綿布を70本ほど束ねたナカヌイ（内塗り）を釉薬にひたして塗付する方法に変わった。これは体力的な理由による施釉作業の省力化である。

「釉は、粘土を水簸したものと木灰を水簸したものとを3.5対1の割合で混合した、いわゆる土灰を使っているが、昭和初年から、これにマンガンを添加するようになった。これは融点を下げるための処置である。」（横山浩一「佐賀県横枕における大甕の成形技術」『九州文化史研究所紀要』第27号1982年82頁より引用）

釉薬の原料である荒土（サビ）と木灰の水簸作業は工場の横手の土中に半分ほどいき込んだ大甕で行われる。原料をそれぞれの大甕で水に溶かし、エグリと呼ばれる樅状の用具で十分に攪拌する。大粒の砂や小石等が底に沈澱すると、きめ細かな粘土溶液や木灰液はそれぞれ脇の大甕に溜める。甕から移すときには、チョッパスと呼ばれる半截円筒形の容器を使い、薬溜しにはシイノというシユロ織維の網張りのフライを使用する。マンガンは



▲ クミの使用法（2本の場合）



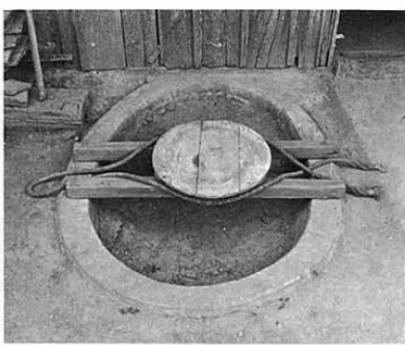
▲ 素地の天日乾燥、廻し金とクミダシ（左下）

サビに混合して一緒に水薬（粘土のせん）という）する。

水薬した二種の溶液を調合して釉薬を作ることを「くすりあわせ」という。溶液の濃さを合わせるために、比重計が使われるが、これは特別な用具ではない。化学で使うガラス製の試験管に適量の土を入れて溶液中に入れるとウキのように立つ。沈んだ管の液面での位置を記憶していく、次に別の液中でも同じ位置まで管が沈むように濃さを合わせる、簡単な方法である。調合には1升マスやバケツをはかりとして使用し、両液がよく混合するように「キャーキ」という長さ95cmの棒で攪拌して調合が完了する。

窯詰め 窯は連房式の登窯で4室から成り、昭和3年に築いたもので、トタン葺きの覆屋がついている。燃料は松材を使用し、近年には家を取壊した廃材を利用していく。重油バーナーを導入したのは昭和25年頃である。薪だけの場合とバーナー半日使用（責め焚き時）でも焼き上がる時間は変わらないといい、バーナーは労働の省力化に効果をもたらしたものである。

窯詰めは、昭和53年9月29日の調査時の場合、手前のI室に銷壺400個、II室に600個、III室は大壺20本、IV室には24本が入っていた。大壺は天井の高い所に置くが、大壺（中二石か）はまず平らに敷いたレンガの上に正立し、その上にもう1個の大壺を倒置して、合口とするが「上下の壺の口が焼着しないように、下壺の口線上に石粉をまぶした粘土の小塊を、適当な間隔をおいてならべておく。」（前記の横山論文 82頁より引用）



▲ 熟薬溜と施釉法（省力化の場合）

大天ガメ（女壺）の場合では、中に2斗～3斗位のミソガメを入れたが、のちには植木鉢を入れるようになつた。このような詰め方を「なかいれ」と呼んでいる。

素地は水平に窯詰めされるのが通常であるが、火が片面に強く当たる位置に据える大壺は、後方に少し傾けて据えられた。これは、火表側は火勢が強くて早く焼け、水平に据えた場合には倒れて他の壺まで壊すことがあるので、倒壊を防ぐ工夫のひとつである。

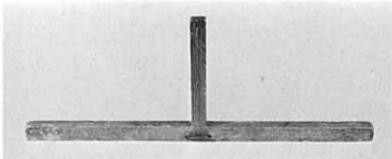
窯詰めに当たっては、手製の簡単な水準器が使われる。これはジョーグ（定規）と呼ばれ、L状の中央の角棒には垂直線が引いてあり、上方の釘から錐りをつけた糸をたらして、壺の口縁の水平を定めるのである。壺を火裏側へ傾ける時は、糸が奥に振れるようにするが、糸と線がなす角度は目測による永年の勘で決める。

窯焼き（昭和53年9月調査） 窯の焚き口は3ヵ所あって中央が大きく、そのすぐ両脇はやや小さい。II～IV室にも左右それぞれ一ヵ所の焚き口があり、窯全体として計9ヵ所となる。

窯焚きは第I室から焼き上げて上室へと次々に責め焚きしていく、4室で6日6晩ほどかかる大変な体力を必要とする作業である。製品を窯出しするのは、1週間ほど冷してからである。

9月27日の朝7時に中央の大きな焚き口に火入れし、半日ほど焚き続ける。その後、II～IV室の左右の焚き口にも角材を差し込み、火を入れる。これは窯全体に低い温度の熱をまわして、窯や素地に含まれる水分をとるホケ取りのためである。このホケ取りの段階では、黒煙ではなく白くて少しねバネバした水蒸気が出るのが特徴である。翌28日もホケ取りを続け、火入れからほぼ2日たった頃にそれまでは火をたいていなかったI室の両脇の焚き口にも火を入れて火勢を強めていく。

3日目（29日）の朝、II室の左右で焚いていた火を取り、両焚き口をトンバイと粘土で塞ぐ。II室もこの時はすでにI室の熱炎によってホケ取りは完了している訳で



▲ 定規（水準器）



▲ 窯焼き（責め焚きの段階）

ある。I室の3つの焚き口では盛んに火を燃し、午後1時半頃には、ほぼ焼き上がりに近づいている。ここで、密閉したII室左右の焚き口下部の穴にそれぞれバーナーを差し込み準備する。午後2時にそれまで薪を焼きホケ取りしていたIII室の焚き口を密閉する。午後3時、I室は完全に薪だけで焼き上がり、II室のバーナーに点火する。この時点でII室の素地はすでにI室の炎が天井までまわって3分の1ほどは焼けており、15時間ほど焚くと焼き上がる予定である。I室の焼きがII～IV室の出来を決めるので、気が抜けない作業である。

結局、I・II室でほぼ3日3晩かかるが、調子のよい時は2日2晩でよいこともあるという。III・IV室もそれそれ15～17時間の時間を要して焼き上がる。

窯焼きは、元は年に4回したが、夫婦だけで仕事をするようになってからは2回に減った。昔の共同窯やこの藤田窯でも薪だけで焚いた時分には、男だけの仕事であった。夫婦二人で焼く場合では、夜8時から1時までを妻のタケ夫人が分担し、男氏は1時から朝7時までを受け持つ。仮眠も窯の横の小屋でする程度で、「窯焼きはねむられないのがきつい」という。特に妻は他にも炊事や洗濯の仕事があり大変である。食事は朝は疲れているので食べたり食べなかったりで、正午頃に昼食、5時頃に夕食を食べる。夜食としてはニギリメシを2～3個を食べる程度で、これは50年間ほとんど変わらなかった。火熱の厳しい場所での作業であるが、塩分補給のため塩をなめたり、梅干を食べるといった特別のことはせず、お茶を飲む程度である。

販売 窯出した製品は、横枕の場合では長崎県壱岐、東松浦郡の名護屋・呼子方面から唐津の浜崎・玉島、七山、福岡県の糸島郡方面の福吉や周船寺へと直売された。桃川や多々良の製品は伊万里の問屋が購入し、窯の底に自分の屋号を墨で書いて販売した。問屋は焼き上がった壺の出来栄えを3級品に認定し、2級品として売出すこともしたという。



▲ ホケ取り（水分の除去作業）

武雄の製品は佐賀方面が販路であったので、今日でも九州各地はもとより沖縄でも泡盛醸造用として使われている肥前の大甕は、伊万里の窯問屋の手で積出されたものであろう。

さて、横枕の製品は船に乗せて各港まで運搬するまでが窯元の責任範囲であったが、呼子の港まで運び、壱岐から来た業者に引渡すことになっていた。

製品は横枕近くの浜白橋から2～300メートル上流にあったカメドバ（甕土場）まで運び、船で唐津の船宮までまず下り、近海はそのままこの船を行った。土場は、堰を作つて川水を湛め、石炭を船に積み込むと堰の板を外して、水の勢いで川を下っていく仕組みで、それが甕の運搬にも利用されたものであるが、これは大正時代頃のことといわれる。カメドバまでは壺2本を前後に天秤棒で荷負っていたが、のちには車力が利用された。藤田氏は14歳（大正11年）頃まではカメドバから船で運んだ記憶がある。のちには、小型の自動車にかわりやがてトラックでの運搬へと変化してきたのであった。

藤田氏が窯をしてすでに4年になり、各時期における製品の販価の推移や蛸壺・土管・摺鉢・便所甕・植木鉢等の製作法と用具等の完全な調査が急がれる。また多々良や武雄地区の窯作りや数年前に廃業した神崎町の棟瓦の叩き作り等々の調査も肥前の大甕作りの技術的な特徴を明らかにするには不可欠なものである。

さらに技術の系譜と年代問題については、韓国で今日も日常雑器として重用されているオング（甕器）と呼ばれる粗質褐釉陶器は、製作技法・用具・施設の各方面で、肥前の大甕作りと類似・共通する点が多く、両者の比較研究作業が問題解明の大きな手振りとなるものであり、稿を改めて、上記の諸問題を論じたい。

最後に、当館の調査に終始協力し、用具一式を寄贈された藤田勇・タケ御夫妻に感謝の意を表します。

〔学芸員 藤口健二〕

研究メモ 2

佐賀県における洞穴遺跡の立地（その2）

③ 砂岩層以外に位置する洞穴

佐賀県内に分布する多くの洞穴遺跡は、風化作用等の自然現象によって形成されやすい砂岩層の露出地域に点在することが一般的であり、その分布状況については前号①で記したとおりである。しかし、鹿島市の儀助平(Gisukedaira)洞穴と近年発見された西有田町の竜門(Ryūmon)洞穴は、その形成状況が異なっている。

【儀助平洞穴遺跡】

儀助平洞穴の位置する経ヶ岳を主峰とする多良岳山系は、佐賀県側に多くの舌状丘陵を形成し、丘陵の裾野は有明海に面する海岸線をなす。現在の集落は、この海岸線と河川に接する低丘陵上に集約されている。

洞穴は標高約300mの舌状丘陵の西側斜面に開口し、洞穴の位置する谷あいには有明海に注ぎ込む浜川の支流である小川内川の上流がある。洞穴は安山岩の露出部分が自然の侵蝕作用によって形成されたもので、岩壁の規模は横幅約25mを有する。この岩壁の内、雨水を防ぎ住居として使用することの可能な屋根の範囲は、北端から9.2mのところまで形成されており、岩壁北側部分が洞穴として利用されたものと推定できる。洞穴の最大奥行は5mの現状を有するが、洞穴前部の落石の状況から、洞穴が使用された当時の屋根の形状は現在の状況よりも前方へ突き出していたと推定される。このことは、現状よりもはるかに広い生活空間が形成されていたと考えられる。しかし、この洞穴は充分な生活空間を得ることが可能であつたけれども、西側に開口している洞穴の形状は、住居として最も考慮される日照時間の確保に不足をきたしたこととはい

うまでもない。またこのことは、古墳時代の地層に頗著にあらわれており、洞穴内に相当大きな炉が設けてあり、人工的に火力を補う必要があったことを示している。

このように、儀助平洞穴は県内の他の洞穴と比較した場合、良好な立地条件とは考えられないが、縄文時代から古墳時代に至るまでの出土遺物の確認は重要な住居の一つと考えられる。また、多良岳山系の中腹という地理的環境は、石鎚や石匙等の狩猟用石器が多く出土するところから、食糧源となる各種動物の生息と木の実等の採集に適した地域であり、この洞穴以外に開地住居も営まれていたことを推定することが可能である。

【竜門洞穴遺跡】

黒髪山系西側の標高150m、西有田町大字大木甲の国有林の中に位置する「竜門洞穴」は、黒髪山系の主体をなす石英粗面岩の自然崩壊によって形成されたものである。洞穴は南に向かって開口しており、その間口は約30m、奥行が約20mを有する大形のものである。時代の蓄積である土層の堆積は、洞穴の入口付近と前庭部に限られており、洞穴の奥の部分に堆積は見られない。洞穴の前庭部の5m下には広瀬川の上流が西流し、本流の有田川へと注ぎ込み、有田川の西岸の国見山系には旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く点在する。

この竜門洞穴は表面採集による調査のみで、遺物や層位の実体については明確にされていないが、黒曜石を産する腰岳に接するという地理的条件から、黒曜石製の剣片が多く発見されている。また、国見山系に位置する砂岩の白蛇山岩陰遺跡等と立地条件が適合するところから、この竜門洞穴も旧石器時代から縄文時代にかけての住居あるいは生活の場として利用したことが推定できる。

この儀助平洞穴や竜門洞穴のように、安山岩や石英粗面岩地帯でも自然の崩壊による洞穴の形成がなされており、洞穴形成の容易な砂岩層地帯以外においても、洞穴や岩陰の分布調査が必要である。

〔学芸員 森 醇一郎〕



儀助平洞穴外景

県内博物館案内（その14）

佐野常民記念館

○所在地 佐賀郡川副町早津江398番地

○交通の便 佐賀駅前より市営バス早津江線乗車35分、
早津江終点下車、徒歩5分。

○開館時間 午前9時～午後4時まで

○休館日 国民の祝日、日曜日、年末年始(12月28日～1
月3日)

○環境と歴史

川副町は県の南東部にあり、佐賀郡の南端に位置している。南には有明海が広がり東には筑後川、早津江川が流れ、その中洲には大詫間島がある。有明海の干拓が時代とともに進むため海岸線が南下し、南北に長い地形となっている。町は面積45.37km²、人口約2万人で米作を中心とした農村であるが近時、海苔養殖が盛んで、全国一の海苔生産地となった。早津江川をへだてて大野島をのぞむ堤防道路の南側、早津江川に面した三重津といわれる一帯が佐賀藩海軍所・蒸気錠製造所がおかれていたところである。

文化5年(1808)、佐賀藩はフェートン号事件(イギリス軍艦フェートン号が長崎港に不法侵入し、オランダ商館人を捕らえ、薪・水・食糧を要求した事件)でイギリス海軍の脅威をうけ、安政2年(1855)幕府が長崎においてた海軍伝習所へ48名の練習生を送り、ついで安政5年(1858)8月、三重津に船手稽古所(後の佐賀藩海軍所)を設立した。現在この堤防道路の東端に海軍記念会の手による藩兵学校跡の石碑がたっている。「三重津海軍所絵図」(県立博物館蔵)には三棟の兵舎そして西の入江の船入場に甲子丸・電流丸など11隻の蒸気船が黒煙をあげながら碇泊している姿が描かれている。また船入場の西側の地は海軍所時代ここに製錠所(蒸気錠製造所)鍛冶工場・船渠(ドック)・石炭置場などがあり、ここで文久2年(1862)田中近江・儀右衛門親子が船用蒸気錠三個を製作し、慶応元年(1865)国産初の蒸気船凌風丸が進水している。

この佐賀藩の海軍創設に重要な役割を演じたのが佐野常民である。文政5年12月28日、佐賀藩士下村充資の五男として佐賀郡川副町早津江に生まれた。通称鱗三郎、後榮寿左衛門。諱は常民雪津と号した。幼少にして藩医佐野常徳の養子となり、藩主より栄寿の名を賜わる。13歳にして弘道館に学び、秀才の名高く、医学を志し、諸方洪庵・伊東玄朴等に学んで蘭学・医学・化学を修めた。嘉永6年(1853)31歳、佐賀藩精錬所を創設し、主任となり、鉄砲・汽車・汽船その他各種の器械製造に活躍した。一方時代の進運にさきがけて長崎に赴き、砲術・航海・造船術を伝習し国産初の蒸気車や船の模型・電信機・アームストロング砲・初の洋式帆船晨風丸などを次々に完成した。文久元年39歳、佐賀藩三重津海軍所の海軍取調方役となる。慶応3年、45歳、藩命によりバリ万国

博覧会参加のため渡欧し、帰國後藩の兵制改革を行う。明治3年、48歳、政府に召されて兵部省に入り、兵部少丞に任じ、海軍掛となるに及び大いに海軍創設に尽力し、遂に日本海軍の基礎を確立させた。明治4年、49歳、工部大丞兼燈台頭となり、洋式燈台の設置にあたり、明治6年、51歳、ヴィーン万国博覧会に副總裁として渡欧、8年元老院設立と共に議官に任命。明治10年、55歳、西南戦役に際し、大給恒と謀り、博愛社を創設して、官賊の別なく負傷者を救護した。明治12年には日本美術協会龍池会を創立し、会長となり、内国勵業博を開き、学术文化の興隆に貢献した。明治13年以来、大蔵卿、元老院議長、枢密顧問官、官農商務大臣等を歴任し、その間20年には、日本赤十字社の初代社長となり、華族に列し子爵を受けられ、後伯爵に陞爵せられた。このように佐賀藩が生んだ明治維新的元勲の一人であり、また日本赤十字社の創設者でもある佐野常民の記念館は、生誕150年にあたる昭和47年に開館。記念館は早津江公民館と併設され、建設費22,386,000円、展示室は3室に分かれ、展示室総面積209m²。佐野常民の不滅の業績を讃えるとともに、遺品、文献、資料等を収集保存し、その偉大なる遺徳を永く顕彰するための貴重な資料館であり、今後ますますの充実、発展が期待される。

○展示資料

博愛社設立の願書・博愛社提出の願書

皇后陛下の博愛社事業御奨励の恩賜金文書

東伏見宮殿下博愛社總長御承諾の電報

飯田町日本本部敷地御下賜の際の御達書

博愛社最初の広告文案

明治10年戦役における博愛社の活動に関する報告書

東伏見嘉影總裁承諾書簡・博愛社々員締盟状と辞令

日本東京博愛社略記

万国赤十字社加盟を政府へ建議原案

赤十字条約締結に付通牒

博愛社々員の証・博愛社々員記録

博愛社で使ったソロバン

博愛社の創立を直截せられた御本當に掲げられた八角

時計

〔主事 森永 茂〕



展示風景

博物館日誌（昭和57年4月1日～9月18日）

4月1日	職員人事異動	7月21日	独立C、S展（25日迄）
4月10日	移動博物館（伊万里市5月20日迄）	7月28日	二科会佐賀支部展（8月1日迄）
4月14日	収蔵庫ガス燃蒸	7月28日	博物館実習（8月7日迄）
6月3日	常設展「佐賀県の歴史と文化展」（9月26日迄）	8月4日	緑光会展（8日迄）
	佐賀美術協会展（13日迄）	8月11日	佐賀県勤労者美術展（15日迄）
6月23日	書作家協会展（27日迄）	8月18日	七夕書道展（22日迄）
7月6日	平松老人大学（仏教美術講座）	8月27日	九州新工芸展（9月5日迄）
7月13日	平松老人大学（近代美術・考古講座）	9月12日	理科作品展佐賀市支部展（16日迄）
7月14日	エマ会展（18日迄）	9月18日	理科作品展佐賀県本展（24日迄）
7月20日	平松老人大学（工芸、自然史講座）		

昭和57年度行事のお知らせ

常 設 展 (原則として月曜及び祝日の翌日休館)			
展覧会名	会期	観覧料 ()内は団体料金	内 容
佐賀県の歴史と文化展	2月23日(火)～3月31日(木)	大人 100 (60) 大・高生 60 (40) 中・小生 40 (20)	佐賀県の自然史、考古、歴史、美術、工芸、民俗の各部門の資料を展示し、佐賀県の歴史と文化を紹介

企 画 展 (原則として月曜休館)			
展覧会名	会期	観覧料	内 容
佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展	2月23日(火)～2月27日(土)	無 料	佐賀大学の卒業制作品。絵画、彫塑、工芸の各部門を展示
壳茶翁展	3月1日(火)～3月27日(日)	大人 500(400) 大・高生250(150) 中・小生150(100)	煎茶道の祖壳茶翁（佐賀出身）の生涯を遺品、墨跡を中心に展観し、日本文化史に果たした足跡を追求する。

博物館報	第 58 号
発行年月日	昭 和 57 年 10 月 1 日
編 集	野 村 綱 明
発 行	佐賀市城内 1 丁目 15 ~ 23
印 刷	佐 賀 県 立 博 物 館
	佐 賀 印 刷 社